「五部哥かゞみ」のこと

「五部哥かゞみ」という板本は、享保五年に刊行された上下二冊本であるが、国書総目録第三巻によれば、刈谷図書館・神宮文庫・祐徳稲荷文庫等に所蔵されている。大日本歌書綜覧に、「五部歌かかり」一巻としているのは誤である。伊勢・大和・栄花・枕草子・狭衣から、和歌だけを取り出して排列したもので、上巻に伊勢・大和を、下巻に栄花以下を収めている。序文によれば、

春の日のなかき比ほひ閑居のすまひつれ〳〵のまきれにやまとみことうたのふみともとり出て見侍る序に伊勢大和栄花物かたり枕草紙狭衣のうたかれこれくり出すほとといと思ひこうしてかたはらなる人にこれをうつさせ侍りき源氏物語の哥はかりは一冊ものにてけんし哥かゝみと申せしかは今此ぬき書をは五部哥鏡と名つけてみつからのたよりともしまたわらはへのよみ習ふたすけにもなすならし

とあつて、成立の事情が知られる。内題は「五部哥鑑」、その下に「遠山北湖彙」とあり、刊記は、下巻の終りに、「享保五庚子孟春日」とある。因みに、「源氏哥かゝみ」一冊は、元禄十一年に刊行され、大阪市立大学図書館に所蔵されている。

架蔵本は下巻一冊の零本であるが、栄花物語の歌六一五首・枕草子の歌三六首、狭衣の歌二〇八首を収めている。刈谷図書館蔵本について見るに、上巻には、伊勢物語の歌二〇九首と、大和物語の歌二九二首が収められている。栄花物語は明暦二年板本に拠つたものと見られ、狭衣も承応三年の板本に基づいているように見られる。その他は、未検ではあるが、それぞれ最も手近な板本類に拠つたものであろうと想像される。

編者の遠山北湖については存知しないが、たまたま本書の一部を入手したので覚え書としてしたためておく。

（松村　博司）

物語文芸における

形容詞類述語形の表現形態についての試論

進藤義治

一　序論

西欧における源氏物語の研究家の中には、源氏物語をはじめとする平安朝の物語文芸に関して、その表現のあいまいさという点をとりあげて、語彙の貧しさとか、言語構造の幼稚さを論じている人がしばしばあるようである。又、わが国の古典愛好者の中にも、古典の文章が持つているあいまいさというものはわが国文芸の伝統的特性であり、そこにこそ論理ではわりきれない情緒性や象徴性といつた美が存在するのだと説いている人もすくなくないようである。

いつたい、この平安時代の物語文芸において、われわれの眼にあいまいさと映るものはなんであろうか、はたして、源氏物語は、それが作られた時代の人にもあいまいな表現として映つたのであろうか ― いや、むしろ反対に、それは当時の人にとつてはきわめて納得のいく明快な表現として感動を呼びおこすものであつたのではなかろうか。

アメリカ人をはじめ、一般に西欧人は、自分の考え方、自分の尺度を絶対のものであると信じて、他をすべて強引に自分の尺度にあてはめて割り切ろうとする傾向が強いといわれているが、現代の日本人にもまた古典をしばしば現代流の発想の論理で解釈しようとしている点はないであろうか。

もしも私が木々の間の木であり動物の間での猫であつたとしたなら、その生には意味があるだろう。或はこの問題そのものが何の意味ももたないだろう。なぜなら私はこの世界と合体してしまうのだから。そうなれば私はこの世界であるだろう。しかし今は、私の全意識によつて、また親近性への私の全要求によつて、私はこの世界に対立しているのだ。人を嘲弄してやまぬあの理性、これが私を一切の事物に対

立させるのだ　（アルベル・カミュ　シジフオスの神話）

唐突な引用だが、これは近年交通事故で死んだフランスの作家、アルベル・カミュの著、シジフオスの神話の中の一節である。ここに述べられている「意識」とはつまり、近代的自意識であり、主体と客体とを峻別する合理主義的な近代人の現実把握の尖鋭化した典型的な姿の一つである。カミュ氏によれば、それゆえに現代の人々は、常に全世界から締め出され、全世界と対立した孤独な自我を宿命的に背負わされているというのである。カミュ氏ほど突きつめてはいないにしても、現代はこうした主体と客体、あるいは主観と客観の峻別をわれわれの思考の根底に深く浸透させている。こうした対象意識を根底に構成されているわれわれの言語感覚にとつては、必然的に、古典の平安朝の文芸の表現というものはかなり異質なものではなかろうか。それはわれわれの科学的な、唯物的な、客観性尊重の言語とは全然別な視点に立つた現実の把握の地盤の上に、それに応じたわれわれとはかなり違つた言語表現の手続きを経て表現化されて高度に発達をとげた一つの世界であり思想であり言語であつたのではなかろうか。人人は言語によつて考えるという心理学者の言葉がある。われわれにとつて、すくなくともこうした古典の表現の現代との根底的な違いという点を拡大して、古典の言語構造を検討しなおしてみることは十分意味のあることではないであろうか。

そういう考えから私は今回この不完全な調査の結果をあえて報告する次第である。

二

Ivan Morris 氏の「A Spect of the Tale of Genji」という論文の中に、この、表現のあいまいさについて、「あやし」という形容詞の用例を例にとつて論じている箇所があるが、現代のわれわれの眼にあいまいと感じられる古典の表現の代表的要素の一つに、この形容詞類（品詞分類上の形容詞及び形容動詞と呼ばれる語彙を今かりにこういう呼び方で総括する。以下同様）の中のある種の語彙――現代流に言えば主体側の感想や心情の表出、あるいは対象に対する主体側の審美的評価の性格の濃い語彙――の用例が多いということがあげられる。たとえば源氏物語の五十音順の語彙索引のアの部をひらいて見るがよい。

あいなし・あさまし・あぢきなし・あはつけし・あはれなり・あへなし・あやし・あやなり・あやにくなり

手あたり次第に拾い出して見ただけでも右のようにいわゆる主体の感想や判断の表出の色彩のきわめて濃い語彙が多く見られる。ところで、よく見るとそれらの語彙はそのほとんどが又いわゆる古典解釈上意味のつかみにくい語といわれているものである。

これらの諸語の意味がつかみにくいゆえんは、なんといつてもその表現する内容が抽象的で感覚的なものであるためであり、その方面の研究もかなり早くから進められていて、すでに正確にその意味の解明されている語もたくさんある。しかし又、一方でこれらの語彙には、単に意味が抽象的感覚的でつかみにくいというだけではなく、更に個々の用例ごとにその文脈の構成にいろいろデリケートなニューアンスの差のある点も注目に価するものである。

その点をしらべて見ようとして、私がまず最初にぶつかつたのは、このような形容詞類の有している対象の性状の記述の働きと、その感想の主体側の感情の記述の働きの二重性の問題である。例えば左のような例を見てほしい。

a 故権大納言のはかなくてうせ給ひにしかなしさをあかずくちをしくこひしのび給ふ人多かり　（源氏物語　横笛）

b あかの具はれいのきはやかにちひさくてあをきしろきむらさきのはちすをととのへて　（源氏物語　横笛）

c 心しらぬ人しもとりいれて大将殿より少将の君にとて御文ありといふぞ又わびしきや　（源氏物語　夕霧）

d かく心こはけれど今はせかれ給ふべきならねばやがてこの人をひきたてておしはかりにいり給ふ。宮はいと心うくなさけなくあはつけき人なりけりとねたくつらかりければ　（源氏物語　夕霧）

e かばかりひまあるをもいとうれしと思ひきこえ給へる御気色を見給ふも心苦しくつひにいかにおぼしさわがんとおもふにあはれなればおくと見る程ぞはかなきともすれば風にみだるる萩の上露　（源氏物語　御法）

f かぎりのほどゆめの心ちせしなど人しれず思ひつづけ給ふにたへがたくかなしければ人目にはさしも見えじとつつみて　（源氏物語　幻）

右の文のaの「多かり」の用いられ方は、「こひしのぶ人」が「多かり」という客観的な対象の程度や状態を記述しているものである。又、同様にbの文の「あをき」「しろき」は蓮の花の客観的な色彩を記述したものといえよう。ところがcの文では少し事情が違つてくる。すなわち、「少将の君にとて御文ありといふ」ことが「わびし」という性状であるのはその事柄の普遍的・客観的性格である以上に、この場面における落葉宮や小少将の、母御息所の病状の小康にほつとしかけていた心にとつて「わびし」という性格の事態なのである。つまりこの文中で「わびし」という語がになつている表現にとつて、この場におけるこの事態によつて落葉宮や小少将の気持ちが「わびし」という状態になつたという記述は、そのわびしという気持ちの対象が「御文ありといふ」という事柄であることの記述と並んで重要なウェイトを占めているわけである。同様にd文の例は「ねたし」「つらし」という感想の対象が図々しく入つてくる夕霧の態度であることを示すと同時に、それに対して「ねたし」「つらし」という感情をいだくのが落葉宮であることも示している例である。

更にeのような文にあつては、「うれしと思ひきこえ給へる」源氏の「御気色」は下の「見給ふ」という紫上の行為に、文脈としては包括されており、その「見給ふ」は「に」という助詞が下接することによつて、「あはれ」という語に対して対象の関係ではなくて「あはれ」という感情の発生の原因という関係になつてしまつている。したがつてこの「あはれ」の対象がなんであるかは全然記載されていない。

じつと文脈をたどつてみると、この「あはれ」の原因は「『(源氏が)おぼしさわがん』とおもふ」紫上の思考であり、又この「あはれ」が原因して次に紫上の述懐の歌が出てくるのであるから、この「あはれ」は当然紫上の気持ちの表出と見るべきである。つまりこの文の「あはれ」の用例は、aやbの例文における「おほし」「しろし」「あをし」に見られたような、形容詞類の客体的な対象の性状を記述する働きはすつかり失われて、紫上の心情を表現する方向にすべてのウェイトが移つてしまつているのである。

それにしても主体側の感想の表出であるのだから、たとえば、「あはれにおぼえ給ひて」とか「あはれにおぼされて」という類の表現を用いれば文脈はきわめて明瞭になるはずである。しかるにこの文の如き、「おぼしさ

わがんと思ふにあはれなれば」という表現では、これは形としては、客観的状態描出の地の文における述語である。述語である以上は、たとえ文中に明記されていなくても、そこに文脈上俗にいう主語なるものとしての記述の対象が強く要求されているわけである。

そこでこの「あはれなれば」の主語にあたる対象を、形の上で求めるならば、前述のごとき文脈の前後関係からして、「紫の上の心の状態」というようなものが省略されていると想定する以外にない。かくてこのような表現は、主体側の心情の表出を、そのような気持ちになつている心の状態という形にして、それをまるでaやbの例文中の「人」や「蓮」のような客体的な対象と同じ位置において、地の文章で記述している形ということになる。

もちろんこのような文脈構成は現代語においても、「うれしい」「かなしい」「くるしい」などの感覚表出性の強い語にしばしば見られることであり、又源氏物語中にも左の如く、

gかの大将殿はれいの秋ふかくなりゆくころならひにしことなればねざめ〳〵にものわすれせずあはれにのみおぼえ給ひければうちの御だうつくりはてつときき給ふに身づからおはしましたり(源氏物語　東屋)

感情表出の形容詞類の下に、おぼゆ・おぼす・思ふ等の語を下接させている用例もすくなからず見られる。しかしながら、源氏物語をはじめとする平安朝の物語文芸にあつては、現代などにくらべて、こうしたeやfの例文に見られるような、主体の感想を地の文の述語の形で表現している用例が、きわめて豊富にさまざまの語彙に数多く見られ、それが文章全体の性格の上にも大きな役割りをはたしていると見られる。

ところで、源氏物語などで、こうした形容詞類の用例を多く集めて比較してみると、この、主体の感想の表出の要素と、客体としての対象の性状の記述の要素とはほぼ相反したような傾向が見られる。

すなわち、例文a、bのように対象の客体としての性状の記述の性格がきわめて強い例では、主体の感想の要素は全然入つていないが、cやdのような文になつてくると、「誰は(《落葉宮は》)」「なにが(御文ありといふ)」「しかじかである(わびしき)」という形や、さもなくば「だれが」「なにを」「しかじかと思う」という——これは思ふやおぼゆの下接する例で形式的な連用修飾であるが——形など、主体の感想と客体的対象とが二重

に出てくる。更に。やfのような文では、「なにが」「なにを」にあたる客体的な対象の要素が「なにによつて」という、その感情の発生の原因という形に変化して、主語の省略された形で主体の感情表出の性格がきわめて強く表面に出てくるのである。

三

前章で見てきたような形容詞類の感情表出の用例は、序の部分でも述べたごとく、現代人とは違つて、主体と客体との峻別の意識の希薄な平安時代の人々の文章にあつては、自由に広く駆使することが可能であつたのであろう。そしてそこに、登場人物の主観とも、読者をも含む準客観的な表現とも割り切れない微妙な情緒の世界を生み出しえたのであろう。

ところで、こうした感情表出性の強い語と客体との結びつきの強い語とを語彙として区分してみようという試みは一見容易なようで、その実きわめて困難なことである。たとえば一方に「白し」とか「多し」のような語彙を考え、他方に「うれし」や「かなし」の類を考えてみると、きわめて明瞭に分類できそうに見えるが、実際にはどちらに含めたらよいのかわからないような、両方の性質が混合した語がきわめて多い。例えば「あさまし」や「いみじ」はものごとの程度のひどさを表わす性格の強い語であるが、程度のひどさを表わす語だから対象との結びつきが強かろうと思うと、

。わかき人はいとほのかにみたてまつりてめできこえてすずろに恋たてまつるによの中のつつましさも思えず　君ぞいとあさましきに物もおぼえでうつふしふしたるを　（源氏物語　東屋）

。物もえのたまひやらず涙もろにおはせぬ心つよさなれど所のさま人のけはひなどをおぼしやるもいみじうてつねなきよのありさまの人のうへならぬもいとかなしきなりけり　（源氏物語　夕霧）

右の例にも見られるごとく、それぞれ感情表出の性質の濃い用例が多い。又「はかなし」という語などは元来ほんのかりそめな、ちよつとしたというような客体の程度分量をあらわす傾向の強かつた語であろうが、すでに源氏物語などの文中でも、たよりない、心細いという感じに近い感情表出性の添うた用例が多く見られる。あるいは逆に「つらし」や「にくし」は主体の感情の表出の色彩もきわめて濃い語であるが、同時に対象の意識もかな

り濃厚である。

同一語でもたとえば左の「あはれ」の用例にも見られるように、

。長恨歌王昭君などやうなるふはおもしろくあはれなれどことのいみあるはこたみはたてまつらじとえりとどめ給ふ　（源氏物語　絵合）

。見し心地する木立かなとおぼすはやうこの宮なりけり　いとあはれにておしとどめさせ給ふ　（源氏物語　藤生）

用いられ方によつて、かなり対象の性状記述の色彩が濃くなつたり、主体の感情表出の要素が強く出てきたりする。

又、このような形容詞類のうち、感情表出の性格の強いものの用例が物語文芸においておおいに発展・増加して情緒文芸をつくり上げたのだろうという常識的推測にも、そう簡単に肯定をあたえるわけにはいかない。たとえば、前出の「うれし」や「かなし」のようなきわめて感情性の濃い語でも、源氏物語における用例回数の割り合いは、竹取・宇津保などの古物語にくらべてほとんど増加していない。これは一般に形容詞類全体の用例率が竹取・宇津保にくらべて源氏物語では二倍以上になつている中で注意を引くことである。（次章　参照）

又反対に「いたし（甚）」のような程度・分量の語で、すでにほとんど副詞化してしまつている語の用例が源氏物語ではきわめて多く用いられている。こうしたことを考えると問題はきわめて複雑である。

そもそも、形容詞とか形容動詞というのはいつたいどういうジャンル立てであるのかということになると、これがまたきわめてむつかしい問題である。

いうまでもないことであるが日本語の形容詞という品詞は西欧語のadjectiveよりはかなり広い用途を持つておりverbやadverbのごとき役目も有している。又反面、西欧語でいう形容詞的修飾をなす語がすべて日本語の形容詞ではない。

故山田孝雄博士は、

形容詞は事物の性質状態が超時間的の静止観念として心に描かれたるをあらはせる実質用言なり

と定義されたが、これは主として状態をあらわす動詞との関係に難があつて全面的に肯定することができない。松下大三郎博士がいわゆる形容詞をいわゆる動詞とともに一括して動詞と呼んでいられるのは周知のことである

が、諸家のさまざまな研究にもかかわらず、結局、活用形とか命令形がないというような外形上の区分による以外には、形容詞というものの決定的な定義はたてられないのが現在の状態であるし、又、形容動詞にいたつては、品詞としてはきわめて不安定であり、正式には独立した品詞とみとめない傾向が強くなつて来つつある状態である。

今回実際にいくつかの形容詞類の語の実例をしらべていてつくづくと感じたことは、同じ形容詞類といつても、実際の用例を見ると、個々の語によつてさまざまな特性や偏つた用いられ方が目立つたことである。

例えば、「多し」という形容詞は、一般の形容詞が概して助動詞が下接する場合においてカリ活用をとり、他の場合はク・シク活用をとる傾向が強いのに反して、終止形にもカリ活用が頻繁に用いられている。又連体修飾の場合、連体形によらず、「ク活用連用形十の」の「多くの」という形で用いられる例が圧倒的に多い。もつとも他の形容詞でも「あはれのことや」「かなしの御ことば」などと「の」を介して体言にかかる例はあるが、それらは、語幹から「の」に下接する用法であるし、又連体修飾用例のうちで占める割り合いはごく僅かである。

「うれし」という語について見れば、「うれしくも対面たまはりつるかな」というような、うれしという感想をあらわす表現が、その感想の対象ないしは原因である動作行為に対して連用修飾の形をとつている例が――このような用例は他の若干の語にも見られるのだが――目立つていた。

「あはれなり」という形容動詞は、「と」という助詞を介して下接する用言にかかつて行く用例がかなり多くあつたが、その場合ほとんどすべてが「あはれ」といういわゆる語幹の形で「と」に接している。いうまでもないが「と」助詞は一般に終止形に下接する傾向の強い語である。

「いたし」という語は形こそ形容詞だが実際にはほとんどが連用修飾で程度をあらわす用例であつて、副詞と見る方が妥当なくらいであるが、それでも源氏物語などでは若干ながら明瞭な連体修飾や述語の用例を存している。

「おなじ」という形容詞は連体修飾の用例が大部分を占めているが、ほとんどすべての例が、「おなじ」という語幹のままで連体修飾をなしており、「おなじき」の用例はごくすくない。又この「おなじ」語には「おなじ

ごと」という形で「ごとし」と熟した用例や連用形に「は」を下接させた「おなじくは」の形の慣用句の用例が多いことも目についた。

こうした各々の現象は、別に理由もない、単なる用語上の習慣的くせというべきかもしれないが、どうもそうとばかりもいえないような、それぞれの語の持つている本質的な性格とかなり深いかかわりを持つているように思われる節々がある。

「多し」の例なども、一見単なる発音上の問題のようでもあるが、それ以上にこの語の持つている程度分量指示の徹底した性格に関係がありそうに思われるし、又「うれし」の例については、これらはうれしさを強調する一種の強調形ではなかろうか、そうであるとするなら、そこに「うれし」という語の感情表出性の中の躍動する喜びの気持ちがこういう表現となつて表われているような気がする。もつとも、同じ感情性の強い語でも「かなし」などにはこうした用例がほとんど見られないことも、両者の感情内容の違いかとも思われ、同じ感情語といつてもその性質が違えば、表現の形式にも違つた偏向が生じるのかと興味が深い。

「あはれ」の用例は、「あはれ」という語そのものの品詞上の問題ともからんで感動詞「あはれ」などとの関連を想起させる。その他、「いたし」や「同じ」の分量・程度・状態の表示の質の問題など、それぞれ実際に用いられている形が、その語を用いた人々の語感を反映しているように思われる。

そこで、若干、こうした形容詞類語彙の実際の用例の状態を、主として源氏物語などを中心にしらべて見た結果を以下報告してみる。

単に用いられ方に独特なニューアンスがあるというだけでなく、語彙の豊富さ――すくなくとも形容詞類としては現代語よりかなり語彙は豊富である――と用例率の高さにおいても形容詞類は源氏物語の文体の大きな特徴をなしている。私の調べた結果では――大まかな調査だが――すくなく見つもつても、源氏物語における形容詞類の用例回数は同じくらいの長さの現代文中の用例数の二倍以上に及んでいることは確実である。そして又、物語文芸中での形容詞類の用例率は、物語のいできはじめの祖といわれる竹取物語や、伊勢物語の頃から、宇津保、落窪の文体などをへて時代が下るにつれて急激に増加の一途をたどり、物語文芸の最高峰の源氏物語に至つて一

つのピークをなしている。もちろん平安期のものといえども、今昔物語などの説話文芸など違うジャンルの文芸の文体にあつてはその用例数はほとんど増加してはおらず、物語文芸のごく初期の竹取物語などとほぼ同率のままである。ただ、一応ジャンルとしては物語文芸以外ではあるが、かげろふの日記、和泉式部日記などの女流日記や、清少納言の枕草子など物語文芸の作者と同じ階層の作者の手になつた仮名文芸には、同様にこのような形容詞類漸増の傾向はやはり顕著に見られる。こうした点からも従来いわれている女流日記と物語文芸の関係の深さは再確認できよう。要するに形容詞類の頻用ということは平安期の後宮に発達した文体の一大特徴と見ることができよう。

それではそのような王朝の物語文芸の形容詞類の用例は各作品において、どのような語がどのくらい用いられているかということになるが、全体的に見ると、一方に三十種類内外の用例率のずばぬけて高い語の用例群と、他方に一語の用例回数は作品全体で一ないし三回くらいの用例率のひくい数多くの語の用例群とから成つている。後者の用例は、源氏物語などでは、二つないし三つの語が結合してできた複合語や連語が多く、それが文章のデリケートな感覚の表現に大きな力になつているものと思われるが、同一語の用例の数がすくなくて調べにくいので、本稿ではまず前者、用例率のずばぬけて高い方の語を扱つて見る。

左に示したものは、私が日本古典文学大系本本文の散文部全体から数えあげた、宇津保物語、源氏物語、浜松中納言物語における用例頻度のずばぬけて高い類の語彙の一覧表である。

表A

	宇津保物語		源氏物語		浜松中納言物語	
	語	用例数	語	用例数	語	用例数
1	なし	回 857	なし	回 1418	なし	回 349
2	よし	541	あはれなり	747	いみじ	318
3	おほし	333	いみじ	698	あはれなり	287
4	いみじ	322	おほし	551	かぎりなし	90
5	あやし	317	をかし	551	めでたし	80
6	おなじ	287	よし	522	かなし	79
7	ちはれなり	250	あやし	507	ふかし	67
8	おもしろし	220	ことなり	405	あさまし	54
9	さらなり	220	いたし	359	いとほし	53
10	かしこし	199	いとほし	342	おもしろし	49
11	かぎりなし	190	ふかし	342	めづらし	49
12	かなし	163	ちかし	315	くちをし	48
13	きよらなり	162	心くるし	289	あさし	47
14	をかし	160	はかなし	288	よし	45
15	ちかし	152	なかなかなり	287	ちかし	44
16	めでたし	141	さらなり	284	たかし	43
17	ひさし	140	くちをし	283	をかし	41
18	ことなり	133	おなじ	280	うれし	41
19	うれし	119	さすがなり	272	心くるし	41
20	たかし	111	かなし	267	なつかし	41
21	しろし	105	わかし	243	さすがなり	40

		回		回		回
22	きよらなり	95	くるし	240	あやし	39
23	おそろし	94	うれし	212	おほし	38
24	おぼつかなし	94	はづかし	204	心ほそし	38
25	はやし	92	あさまし	194	ありかたし	37
26	ちひさし	86	なつかし	193	はづかし	37
27	くるし	85	つらし	187	心うし	35
28	わかし	84	こよなし	184	おぼつかなし	34
29	あし	80	心うし	183	たぐひなし	33
30	いかゐし	80	めづらし	175	おなじ	32

この表は．宇津保物語　源氏物語　浜松中納言物語中の散文部における形容詞類語彙の各用例数最多のものから30番目まで並べたものである。

この表で見てもわかるように、各作品ともおおよそ同じような語が、用例回数の多い語として並んでいるがよく見ると順位に大分違いがある。総体的にいえば宇津保物語にくらべて源氏物語や浜松中納言物語の形容詞類の用例の割合はかなり（ほぼ二倍近く）増加しているが、それはどの語も平均して同じような割り合いでふえているのではなくて、語によつては七倍にも八倍にもふえているものもあるが、中にはあまりふえていない語も、中には逆に減つているものもある。もしも前述の如き形容詞類の増加現象が、源氏物語の持つ文芸的質に深い関係がありそうだという想定が可能であるならば、これら個々の語のうちで特にふえている語は、その語の意味や機能において源氏物語の文芸性の構成に大きな比重を持つているということができそうである。

もつともこうした用例率の違いは、各作品の素材の違いによる要素が強いのではないかという疑いもあろうが、文芸ジャンルや内容素材もほぼ同系の物語文芸間での比較であり、更に比較の対象が素材そのものに左右されやすい名詞や動詞とは違う、形容詞類という抽象性の濃い品詞である点を思えば、長部の作品間での用例数の比較を文体や文芸性の質の問題に還元することはかなり妥当な

ことであると思われる。

そこで次に宇津保物語と源氏物語とで同一語の用例回数の差がもつとも大きい語はどんな語であろうか調べて見たいのだが、一つ困る点は、源氏物語と宇津保物語とでは作品の長さが違うことである。当然のことながら長い作品の方が同一語の用例回数は多くなる可能性が強い。宇津保物語と源氏物語の長さの比は、文節の数によつて測つた私の調査によるとおおよそ、宇津保の一に対して源氏は一・五くらいである。思案にくれたが方法がないので今回の調査では宇津保物語中の各語の用例回数に一・五をかけたものを源氏物語中の用例回数とくらべて見た。比率にひどく大きな差はないし、両方とも長文であるのでこの原始的な方法も案外妥当性を有しているかもしれない。もちろん各語が両作品中にどんな状態で分布しているか調べないことには決定的なことはいえないが、「あはれ」「をかし」「おもしろし」など若干の語について行つた分布調査ではさほど極端な偏りは見られなかつたので、概略の傾向を知るものとしては可能だと判断した。

次の表Bの1は以上のような操作を加えた上で源氏物語における用例数が宇津保物語のそれより大きいものを、差の最も大きいものから順に三〇語とり出して見たものである。同様にBの2は、宇津保物語の方が源氏物語よりも多いものを最大のものから順に三〇えらび出してみた。

1表Bの1

語＼用例数	源氏	宇津保	字×1.5	差	浜松	浜×6
あはれなり	747	250	375	372	287	1722
をかし	551	160	240	311	43	258
いたし	352	47	70	285	23	138
なかなかなり	282	12	18	264	19	114
こころくるし	285	20	30	255	39	324
さすがなり	266	10	15	251	40	240
ふかし	337	78	117	220	67	402
くちをし	283	33	50	228	48	288
いとほし	342	75	113	229	55	318
はかなし	288	49	74	214	10	60
くるし	240	85	128	212	30	180
いみじ	698	322	493	205	318	1908
ことなり	405	133	200	205	26	156
なつかし	193	8	12	181	41	246
わりなし	165	17	26	149	34	204
こころやすし	161	18	27	134	20	120
つらし	187	35	53	134	9	54
うし	149	14	21	128	15	90
あさまし	202	52	78	126	54	324
こよなし	184	44	66	118	30	180
わかし	243	84	126	117	25	150
あながちなり	112	2	3	109	25	150

はづかし	204	66	99	105	37	222
めやすし	104	0	0	104	3	18
ことごとし	115	9	14	101	10	60
はしたなし	111	7	11	100	7	42
心うし	183	58	87	96	35	210
つつまし	114	13	20	96	14	84
こまやかなり	97	2	3	95	11	66
心ほそし	163	46	69	94	38	228

1表Bの2

語＼用例数	源氏	宇津保	字×6	差	浜松	浜×6
よし	512	541	812	—300	45	270
おもしろし	142	220	330	—188	49	294
おなじ	280	287	431	—151	32	252
かしこし	135	199	299	—164	27	162
きよらなり	95	162	143	—48	4	24
かぎりなし	161	190	285	—124	90	540
ひさし	104	140	210	—106	13	78
はやし	34	92	138	—104	3	18
たかし	76	111	167	—91	9	54
おほきなり	23	77	116	—93	10	60

しろし	81	105	158	—77	10	60
ちひさし	56	86	129	—73	1	6
いたづらなり	25	63	95	—70	14	84
とし	75	74	111	—36	13	78
せちなり	46	72	108	—62	20	120
ひとし	14	43	65	—51	0	0
おほいなり	0	36	54	—54	1	6
いかめし	74	80	120	—46	2	12
めでたし	170	141	212	—42	81	486
おそろし	108	94	141	—33	28	168
めんぼくなし	1	20	30	—29	0	0
ひろし	29	33	57	—28	5	30
あし	94	80	120	—26	8	64
あをし	6	19	29	—24	0	0
おそし	7	19	29	—22	1	6
あからさまなり	18	27	41	—23	3	18
さわがし	36	37	56	20	2	12
みそかなり	2	13	20	—18	2	12
ことなし	19	20	30	—11	3	18
おぼつかなし	130	994	141	—11	34	144

Bの12各表の最右端の二つの欄は、浜松中納言物語における該当諸語の用例回数と、それを六倍したもの（浜松中納言物語は源氏物語の約六分の一の長さであるので、比較にあたつて、宇津保物語の場合と同様に、用例回数の六倍したものを示した）を添えてみたものである。ただし浜松中納言物語は源氏物語にくらべて作品全体がかなり短く、実際の用例数の六倍もの数値をもつて比較しているので、きわめて信用度の薄いものになつてしまつている。ほんの参考までのつもりで付加してみたにすぎないものである。

さてこのようにしてくらべてみると、かなり両作品中の形容詞類の用例の傾向の違いが明らかになつてくる。

すなわち、宇津保物語の方が用例率の高い語すなわち表Bの2の語群は、大部分が、よし、おなじ、かぎりなし、はやし、ひさし、とし、ひとし、おほいなり、ひろし、あし、おそし　など、客体の程度分量をあらわす傾向の強い語であり、それに、しろし、いかめし、あをし、あからさまなり、いたづらなり、さわがし　等の客体の性状を記述する性質の加わつた語が若干加わつた状態である。それに対して、源氏物語の方が用例率の高い、表Bの1は、いたし、ふかしなどの程度をあらわす語やなかなかなり、さすがなりなどの副詞的性格の濃いもの、わかしなどの客体の状態をあらわす語もまじつてはいるが、あはれ、をかし、こころくるし、くちをし、いとほし、心やすし、うし、つらし、くるし、はづかし、はしたなし、心うし、心ほそし　など、一見して例の主体側の感想・感情表出の性格が強いと思われる語の類が多くあつまつている。

結果はだいたい我々が予想していたとおり、源氏物語の中の形容詞類は、それ以前の作品にくらべて、感情・感想の表出の性格の強い語の用例数が増加し、逆に客体の程度分量をあらわす性格の強い語の用例はむしろ減少の傾向にあると大ざつぱに言うことはできることは確認された。

しかし、それにしても、例外的な、むしろ全体の傾向に反した語が大幅にふえている例もかなりあるし、感情表出性の強い語でありさえすればすべて用例が増加しているというわけでもないし、又その反対に、客体の程度分量を示す傾向の強い語でありさえすればすべて用例が減少しているわけではない。もうすこしくわしく、その点の事情をしらべてみる必要がある。

四

前述の如く、日本語の形容詞類の文中での役割は西欧語とちがつて、単に形容詞的修飾――連体修飾のみではなく、他に副詞的な連用修飾と、動詞的な述語の働きとがある。そこで今度は、総体的には前章でのべた如き傾向を有している源氏物語中の形容詞類の用例がこの連体修飾、連用修飾、述語の三つの用法にどのような割り合いで分布しているかを見ることにする。ところでこの分類は、当然のことながら各該当形容詞類のその文中での最小の結びつき関係によつて、連体、連用、述語の三つに分けてみるわけである。従つて左のような例があつた場合

心のうちのあはれに大方の有様なども なさけなかるまじき人の　（源氏物語　手習）

この「あはれに」は、究極的にいえば、「心のうちのあはれに」の形で「大方の有様なども なさけなかるまじき」と並んで「人」の資質と説明している用例であるが、文脈上の最小の結びつき関係としては、「心のうちの」と「あはれに」の間の関係に視点をおいて、これを述語用例のうちに数える。同様に、

さてもかばかりつたなき身の有様をあはれにおぼつかなくてすぐし給ふは心うう仏ほさつやとつらうおぼゆるを　（源氏物語　蓬生）

右の「あはれに」は「おぼつかなく」とともに「て」という接続助詞が下接している点で、連用修飾ではなくて述語であると判断する。又、左の例も

としころの物かたりうきしまのあはれなりしこともきこえいづ　（源氏物語　東屋）

「うきしまのあはれなりし」が一団となつて形式名詞「こと」にかかつて行く用例であるから、「あはれなりし」は「うきしま」に対して述語の関係にある。その他

千鳥いとあはれになく　（源氏物語　須磨）

いとあはれなることにこそきのふほのかにきゝ待り　（源氏物語　蜻蛉）

こうした用例はいうまでもなく、前者は「鳴く」にかかる連用修飾、後者は「こと」にかかる連体修飾とする。

以上のような基準で各語の用例を分類しようとするとき問題になることがもう一つある。それは左の如き用例

の扱い方である。

A (イ)まづ追ひ払ひつべき賤の男のむつましうあはれにおぼさるるも我ながらかたじけなく屈しにける心のほど思ひ知らる　（源氏物語　須磨）

(ロ)御心ゆるし給はずはいつも〳〵、かくてすぐさむとおぼしのたまふを、このおい人のおのがじしかたらひてけしようにさゝめきなどす　さはいへどふかからぬけにやおいひがめるにやいとほしくぞみゆる　（源氏物語　総角）

(ハ)いふかひもなく、此世にはいささか思ひなぐさむかたなくてすぎぬべき身どもなりけりと心ぼそくおぼす　（源氏物語　総角）

B (ニ)わか君うちへまゐらむととのゐすがたにてまゐり給へるわざとうるはしきみづらよりもいとをかしうみえていみじくうつくしとおぼしたり　（源氏物語　紅葉）

(ホ)宮は女君の御さまのいとよくにたるをあはれとおぼしてふたところながめ給ふをりなりけり　（源氏物語　蜻蛉）

(ヘ)なおぼしくむじそさりともはつせのくわんおんおはしませばあはれと思ひきこえ給ふらん　（源氏物語　東屋）

これらのA、B群の用例はいずれも形の上では連用修飾ではあるが、普通にいう連用修飾とはすこしちがつている。

たとえばA群のイの例であるが、これらは普通主体が（この場合源氏であるが）賤の男に対してあはれという感情をいだく意味に解されているが　これは前出の文

千鳥いとあはれに鳴く

の場合の連用修飾とは実質的にはちがつている。すなわち(イ)の文は「〈賤の男＝あはれ〉におぼさる」という文脈構造であり、「あはれ」は実質的には賤のをに対する述語的な要素が濃く、その「賤のを＝あはれ」をおぼさるという語が主体の感想という形にして包括している表現である。これに対して千鳥の方は、千鳥の鳴く状態を「あはれに鳴く」と修飾している典型的な連用修飾であり、したがつて「あはれに」という記述は主体の感想のほとんど入つていない客観的性状の記述である。又、Bの用例なども、たとえばBのニは、形の上では「わか君の……まゐり給へる」（目的語）「いみじくうつくしと」（補語）「おぼしたり」（述語）という形であるがやはり意味の上からすれば、〈「わか君の……おはし

たる」＝「いみじううつくし」〕「ど見る」というように、わか君がうつくしという状態であると主観で判断するという表現であり、「うつくし」は述語的色彩の濃いものである。

以上のような次第でこれらA、Bの例と同じ形に属する用例は他の一般の連用修飾と同じに数えることはできない。そこでいま仮にA群のような形に「おぼゆ型連用修飾」B群の類の用例に「と下接型連用修飾」という呼び名を与えて、述語的要素の濃厚な連用修飾として、他の一般的連用修飾と区別してみた。

さて以上の連体、連用、おぼゆ型、と下接型、述語の五つの項目にわけて表Bの語彙の源氏物語中の各用例を分類してみたところ次の如くなつた。

表C－1

	用例回数 ＼ 語	用例回数					各用例間の比率				
		連体	連用	おぼゆ	と下接	述語	連体	連用	おぼゆ	と下接	述語
○	あさまし	46	40	15	29	70	1	0.9	0.3	0.6	1.6
×	あからさまなり	1	17	0	0	0	1	17	0	0	0
×	あし	23	16	0	6	42	1	0.7	0	0.2	1.9
○	あながちなり	25	82	1	0	3	1	3.2	0	0	0.2
○	あはれなり	175	51	167	138	266	1	0.3	0.9	0.8	1.3
×	あをし	5	0	0	0	1	1	0	0	0	0.2
×	いかめし	25	32	0	0	18	1	1.3	0	0	0.7
○	いたし	3	343	0	2	6	1	114	0	0.8	2
×	いたづらなり	86	19	0	0	0	1	0.2	0	0	0

○	いとほし	39	16	57	27	189	1	0.4	1.5	0.7	5.0
○	いみじ	147	404	26	37	75	1	2.8	0.2	0.3	0.6
△	あやし	150	171	14	50	110	1	1.2	0	0.3	0.9
○	うし	91	1	8	27	23	1	0	0	0.3	0.2
△	うれし	43	17	37	31	78	1	0.4	0.9	0.7	1.8
×	おなじ	208	64	0	0	5	1	0.3	0	0	0
×	おほきなり	14	6	0	0	2	1	0.4	0	0	0.1
×	おそし	1	2	0	1	5	1	2	0	1	3
×	おそろし	20	11	13	10	52	0.1	0.6	0.6	0.5	2.6
△	おほし	21	159	0	0	371	1	7.6	0	0	17.7
×	おぼつかなし	30	13	22	3	69	1	0.4	0.7	0.1	2.3
×	かぎりなし	35	64	0	1	53	1	1.8	0	0	1.5
×	かしこし	57	33	0	0	43	1	0.6	0	0	0.8
△	かなし	61	26	53	38	88	1	0.4	0.9	0.6	1.4
×	きよらなり	14	26	5	0	48	1	1.8	0.4	0	3.4
○	くちをし	54	22	55	23	137	1	0.4	1.0	0.3	2.5
○	くるし	37	23	24	25	129	1	0.6	0.6	0.7	3.5
○	心くるし	66	9	63	14	139	1	0.1	0.9	0.2	2.1
×	しろし	66	5	0	0	17	1	0	0	0	0.3
×	おもしろし	37	21	8	1	19	1	0.6	0.2	0	0.5
○	をかし	182	77	79	42	162	1	0.4	0.4	0.2	0.9

左欄外　の印　○は表Bの1に属する語
×は表Bの2に属する語
△はいづれにも入つていない用例数多き語

この表Cは、表Bの1及び2からと表A中にある表Bのいずれにも属さない（つまり　源氏物語と宇津保物語の用例率の差がさほど大きくない）語の、主としてア行・カ行ではじまるものを抽出して前述の五つの項目に分類したものである。中央より左の欄は各語の連体修飾の用例を一としたときの他の項の用例の割合を示したものであり、これにより各語の用例が五つの項にどのように分布しているかを見るための便宜をはかつた。猶本来ならAB各表に取り上げたすべての語について調査すべきなのだが各語の用例にはそれぞれ微妙な文脈関係のちがいがあり、分類にひどく手間どり、集計の数字もくいちがいがちであるので、一応、源氏物語の用例のみを、ア行カ行まで調べたもので打ち切つて、おおよその傾向をしらべることにした。

まず第一に特徴のある点は、先におぼゆ型・と下接型と仮称して一般の連用形から区別した類の用例である。このおぼゆ型・と下接型の用例の割合の高い語は、すでに我々が主体の感想・感情の表出の性格が強い語として注目していた語とほとんど一致する。

今かりにC表のうちでおぼゆ型と・と下接型の用例がその語の総用例数の五分の一をこえている語彙を抜き出してみると左の如くなる

あさまし $\frac{44}{200}$・あはれなり $\frac{305}{747}$・いとほし $\frac{84}{328}$・うれし $\frac{68}{206}$・おそろし $\frac{23}{106}$・かなし $\frac{91}{266}$・くちおし $\frac{78}{282}$・くるし $\frac{49}{238}$・心くるし $\frac{77}{286}$・をかし $\frac{121}{542}$

しかも右のうち、うれし、かなし、おそろしの三語をのぞくすべては表B中の1・源氏物語の用例率が宇津保物語のそれよりかなり高い類の語に属している。

おぼゆ型と・と下接型とは先にもふれたごとく形として明瞭に、主体側の感想や判断の表現されたものである。したがつてこれらの用例が多くあるということは、その語が主体の感想や感情の表出の要素が濃いものであることのあらわれであると見ることができよう。したがつて表Bの1の源氏物語の方が宇津保物語より大幅に用例率の高い語のうち、すくなくとも、ここにあげられた七語はあきらかに主体の感想・判断の表出の性格の濃いものということが確認できる。

次にふたたび表C全体を少し整理してみる。まず、各語の連体修飾以下の五つの項の用例分散状態において、一、連体修飾の用例がもつとも多い語　二、連用修飾の用例がもつとも多い語、三、述語の用例がもつとも多い語　の

三つに各項を分類する。しかし表Cを見ただけでも各語の用例分布状態はかなり個々の語によつてちがつており、複雑であるので、この三分類を各々更に左の基準によつて三つに区分する。

一、一番多い項の用例数がその語の全用例数の半数をこえるものを、一つの項に用例が集中している語としてとりだす。

二、右の条件にあてはまらない語について二番目に多い用例がどの項であるかによつて細分する。

以上の分類を行つたものを一覧にすると左の如くなる。

（表ノD）

一、連体修飾が一番多い語

イ連体修飾に用例が集中している語

あをし(B2)　うし(B1)　おなじ(B2)　おほきなり(B2)　しろし(B2)

ロ連用修飾が二番目に多い語

おもしろし(B2)

ハ述語が二番目に多い語

かしこし(B2)　○をかし(B1)

二、連用修飾用例が一番多い語

イ連用修飾に用例が集中している語

あながちなり(B1)　いたし(B1)　いたづらなり(B2)　いみじ(B1)　あからさまなり(B2)

ロ連体修飾が二番目に多い語

あやし×・いかめし(B2)

ハ述語が二番目に多い語

かぎりなし(B2)

三、述語用例が一番多い語

イ述語に用例が集中している語

○いとほし(B1)　おほし×・おぼつかなし(B2)　○くるし(B1)

ロ連体修飾が二番目に多い語

○あさまし(B1)　あし(B2)　○あはれなり(B1)　うれし×・○かなし×・おそろし(B2)　○くちをし(B1)　○心くるし(B1)

ハ連用修飾が二番目に多い語

おそし(B2)　きよらなり(B2)

右肩につけた○印は前回の調査で、おぼゆ型と、と下接型の用例が多いと判定された語に付したものであり、同じく各語の右すそに付した記号は（B1）が表Bの1に属する語、（B2）は表Bの2に属する語、×印はそのいずれにも属さない語であるというしるしである。

この分類の結果で目につく現象は○印がほとんど述語の一番多い項に集まつていることである。

○印すなわち「おぼゆ型」や「と下接型」は、先にも見たように形は連用修飾であつても意味の上では述語的傾向の強い表現である。したがつて述語用例の多いことばの中にはおぼゆ型やと下接型の用例も多くあるというのは当然なのかもしれない。そして述語がもつとも多い語群と対蹠的なのが連用修飾――一般的な連用修飾――の多い語である。連用修飾の多い語ではすべて、おぼゆ型・と下接型がきわめてすくない。連体修飾はその中間で、述語の用例について連体修飾が多いという状態の語にはおぼゆ型・と下接型の用例の多い語が多くあるが、述語よりも連体修飾の方が圧倒的に多い語にあつては、もはやおぼゆ型やと下接型はすくなくなつているようである。

しかし、「おほし」や「あし」などという語の例にも見られるように、述語用例の多い語でありさえすれば、すべておぼゆ型・と下接型の用例が多いという必然関係は存在しない。ただ、述語の用例の割合が高く、それに次いで連体修飾もかなりあるという語の中に、おぼゆ型・と下接型の用例の多い語がほとんどすべて含まれているという関係は指摘できると思う。先にも見たように、このおぼゆ型やと下接型は形として主体の感想や判断の表出の形式のととのつた用例である。従つてそのおぼゆ型・と下接型の用例の多い語が同時に又述語用例の割り合いの高い語でもあるということは、述語形という表現形態自体にも他の一般的な連用修飾とか連体修飾以上に主体の感想や判断の表出の要素を含有しやすい性格があるのではないかと思われる。（次章参照）したがつて中には「おほし」や「あし」の如く主体の感想表出性をそれ自体に含有していない語の述語用例も一方にはあるが、他方主体の感想や判断の表出の性格の強く付与されている語の用例は必然的に述語の項に集まる傾向が強いのではなかろうか。

同様に表のBと表Dを照らしあわせてみると、ここで勢急に「源氏物語において用例のふえている形容詞類はすべて、このおぼゆ型・と下接型が多く、主体の感想表出の濃い述語の用例の多い語である。」と断じてしまうのは正しくないことが知られよう。たしかに源氏物語ではおぼゆ型とと下接型、及び主体の感想表出性の濃い述語の用例により、主体側の感想の付加された形容詞類の用例は大幅に増大しているが、この型においてのみ形容

詞類の用例がふえたのではなく、他にも二三の型が――特に顕著な型に一般的連用修飾の型における増大――があるように思われる。

もう一度B表とD表を見くらべていただきたい。すなわち、おぼゆ型・と下接型多く、述語の用例多しという条件にあてはまらない語で表Bの1（源氏物語の用例数が宇津保物語より多い語）に属する語は、今回の調査対象にあつては「うし」以外すべて連用修飾が圧倒的に多い項に密集している。

これはまだ実証ずみではないことだが、私にはどうも形容詞類の機能というものが連用修飾語系と述語系とに大きくわけられるような気がする。連体修飾がそれに対してどういう関係なのか今よくはわからないが、連用修飾と述語とは表現の型において大きく違つており、したがつて源氏物語の形容詞類の増加にあつて、述語系の方は前述の主体の感想表明という形でその新しい用例増加があらわれたが、連用修飾系は又連用修飾系でその表現論理に添うた形で、述語におけると同質な傾向の用例が増加しているのではないであろうか。

現にわずかながらも今回の調査でも、連用修飾の多い語を見ると――いずれも程度分量をあらわす語であるが、源氏物語の方が用例率の高い「いみじ」や「いたし」「あながちなり」「あからさまなり」を見ると、宇津保物語の方が用例率の高い「かぎりなし」や「いたづらなり」には見られない感情表出の用例が見うけられる。

たとえば「いみじ」という語には

あないみじや　いとあやしきさまを人やみつらむ
（源氏物語　若紫）

の如き感動詞にも似た、強い主体の感情――驚き――をあらわす用例がわずかではあるが（源氏物語中に十二例）あるし、「いたし」については、これもわずかではあるが

御さきおふこゑのしければうちとけなえばめるすがたにこうちぎひきおとしてけぢめみせたるいたしかし
（源氏物語　野分）

こたいなる御ふみかきなれどいたしや　この御手よ
昔は上ずにものしたまひけるものを年にそへてあやしくおいゆくものにこそありけれ　（源氏物語　行幸）

の如く、この語としては数すくない述語形の用例（源氏物語中に六例）がすべて感歎の気持ちの表出の強い用例である。

こうした点から考えると、やはり源氏物語においては、

「いみじ」や「いたし」という語の用い方の上にも感情表出の性格がかなり含まれており、それが、源氏物語中でこれらの用語が回数多く用いられている要因ではなかろうかと想像される。

したがつて、そのあらわれであるなんらかの形態上の徴証を探し出せば、それによつて連用修飾系の語ではどんな語が多く感情表出の性格を持つており、それが源氏物語における形容詞類語彙の用例の増加にどうかかわつているのかは明示できるものと思う。

しかし、今はまず、述語系の用例についてのもう少しくわしい検討を先に行つてみたいと思う。

五

さきに述語という形は本質的に主体の側の感想や判断の要素を含有しやすい表現ではないかと思うと述べたが、その点について少し考えて見たい。

1あるまじきこととおもへばあさましく　人たがへにこそはべるめれといふもいきのしたなり　（源氏物語　帚木）

2れいのことなればしるしあらじかしとくづほれてながめふし給へるにかくむねうちさわぎていみじくうれしきにも涙おちぬ　（源氏物語　紅葉賀）

3をり〳〵はむねをせきあげつゝいみじくたへがたげにまどふわざをし給へばいかにおはすべきにかとゆゝしうかなしくおぼしあわてたり　（源氏物語　葵）

4わたらせ給ふぎしきはかはらねど思ひなしにあはれにて、ふるき宮はかへりてたび心ちし給ふにも御さとすみたえたる年月の程おぼしめぐらさるべし　（源氏物語　賢木）

5あすよりやみづほふはじまるべく待らん七日はてゝまかでむにつかうまつらむとのたまへばかのあま君おはしなばかならずいひさまたげてむといとくちをしくてみだり心ちのあしかりし程になりにたるやうにて……　（源氏物語　手習）

6さうのものどもゐ中びたるめしいでつつつげよとの給へりければいとつゝましくくるしけれどうちけさうじつくろひて乗りぬ　（源氏物語　東屋）

これらの感情表出性の強い形容詞類の用例は、いずれも地の文における述語としての文章上の役割りを持つている。述語であるからそこに当然その記述の対象がなにものか（俗に主語ということ多し）想定されるべきである。このような諸例の実質的な記述の対象はなんであるかというと、当然主体者の心情である。「心憎などをあらわす平安時代の語としては「こゝち」などという語がある。そこで、これらの用例は主語としての「ここち」などの語が省略された形であると判断してよいように見える。ところがこれは少し違うようである。

「ここち」を主語にとつている形容詞類の述語の用例は、

7やへたつ山にこもるともかならずたづねてわれも人もいたづらになりぬべし。猶心やすくかくれなんことを思へとけふもの給へるをいかにせむと心ちあしくふし給へり　（源氏物語　浮舟）

8女君まことにここちもくるしけれど人のかういふにうたてけちえんならむもまたいかゞとつゝましければ　（源氏物語　宿木）

のような実例があるが、「うれし」や「かなし」のような感情表出性のきわめて濃い語から「あはれなり」や「いとほし」などという半ば対象の状態の記述の混じた語まで、いわゆる主体の感情・感想表出の性格の濃い語にはほとんどその用例を見ないのである。

次の表は、さきに表Cにとり上げた各語が「ここち」及び「こころ」なる語に対して連体修飾をなしている例と、同述語の用例の源氏物語中における用例回数の一覧である。

1表E－1

用例数	述語例		連体修飾	
語＼対象	心ち	心	心ち	心
あさまし	0	0	3	3
あし	19	0	0	0
あながちなり	0	0	0	5
あはれなり	0	0	1	5
あやし	0	0	1	6
あをし	0	0	0	0
いかめし	0	0	0	0
いたし	0	0	0	0
いとほし	0	1	0	0

いみじ	0	0	0	7
うし	1	0	0	1
うれし	0	0	1	0
おなじ	0	0	0	21
おほきなり	0	0	0	0
おそし	0	0	0	0
おほし	0	1	0	0
おそろし	1	0	2	0
おぼつかなし	0	1	1	0
かぎりなし	0	1	0	1
かしこし	0	0	0	3
かなし	0	0	0	1
きよらなり	0	0	0	0
くちをし	0	1	1	0
くるし	6	2	4	2
こころくるし	0	0	0	1
しろし	0	0	0	0
おもしろし	0	0	0	0
をかし	0	0	0	0

これを見てもわかるように、「ここち」を主語とした形容詞類の述語用例は「あし」の十九例と「くるし」の六例以外にはほとんど用例を見ない。

「あし」という語は、客体の性質を記述する性格が強く、主体の感情を表出する性格はほとんどない語である。又、「くるし」の用例について見れば、「心ち」に対する述語の用例である前掲の8の文や左の

9このことにより身のいたづらになりぬべきこととおぼしなげくに御心ちもいとくるしくてなやみ給ふ
（源氏物語　紅葉賀）

10こちわたりたまうし時御心ちのくるしきにも御ぐしかきなでつくろひおろしたてまつりしをおぼしいづるに　（源氏物語　夕霧）

の如き用例と6の例や左記の用例を比較してみると

11七日の月のさやかにさしいでたる影をかしくかすみたるを見給ひつついとほきにならはずくるしければうちながめられて　（源氏物語　早蕨）

12右近はいかになりはて給ふべき御ありさまにかとかつはくるしけれどよひはつゝましさもわすれぬべし　（源氏物語　浮舟）

同じ「くるし」でも表現のニューアンスがずいぶん違っている。すなわち実際に「ここち」などという具体的な語を主語とした「くるし」の用例は、主体の心理的な苦悩や煩悶を表現せず、むしろいわゆる「胸いたし」（源氏物語中に九例あり）などにも通ずる――肉体的苦痛といおうか、医学の対象となるような状態を表現する例ばかりである。またこのような現象は「あし」の同用例についても言いうることである。表Eの十九例ある「ここちあし」の用例はすべて「気分がわるい」「気分がすぐれない」という類の意味である。それに対して11の例は長い旅で中の君が苦痛を感じているという表現で、広い意味ではやはり肉体的苦痛の記述であり医学の対象のうちではあるが、この例文のように記述の対象が明記されていない文型にあつては主体の気持ちという形で状態の記述が読者に把握されるようである。更に12のような文形、つまり「と」に下接された心理描写を受けて用いられている場合はもはや明瞭な心理的苦悩の描出である。

又、左の如き用例もこのような表現論理の性格をあきらかに示すものと思う。

13まめ人のさすがに人に心とどめてものかたりするこそ心ちおくれたらむ人はくるしけれ　（源氏物語　蜻蛉）

14さらは若君をば見たてまつらで侍るべきかといふよりほかのことなし　はゝ君もいみじうあはれなり

（源氏物語　松風）

この13・14の例文はともに、主語としての記述の対象が人物そのものになつている例であるが、こういう様に主語が明記されると、やはり客体的表現になつている。13の例についていえば、「心ちおくれたらん人」が、「くるし」という心情の表現ではなくて、「心ちおくれたらん人」が相手の人に（一般的に）「くるし」という感じをあたえる性状であることの記述であり、14の文では、これは「あはれ」の用例であるが、母君が「あはれ」という気持ちをいだいていることの表現ではなくて、母君が客観的に（他人の目に）「あはれ」という状態であることを示したものである。

こうした各例を見ていくと、どうも主体の心情や感情の表出ということに主力のかかつている述語用例は、その主体者自身や主体者の「心ち」などを主語の形で明記することをしない傾向が強いように思われる。そしてそのような傾向の生ずる理由は次のような事情によるのではないかと思われる。

つまり、述語表現は本来客体的対象の性状を記述する表現形態である。したがつて主体の心情を表出する表現に具体的な語を主語として明記すれば、必然的に、述語たる形容詞類はその主語の客体としての性状の記述の表現となつてしまう。そうなることを避けて主体者の心情・感情を表出したいという志向が、言語感覚の上に対象の（主語の）不明な述語表現を生み出しているのではなかろうか。

このように考えれば対象不明記な述語の用例の多い語は又前出の「おぼゆ型」や「と下接型」の用例の多い語でもあるという現象（次の表F参照）はうなずけると思う。つまり対象の不明記な述語の表現は主体そのものの感情や感想を表出する表現であるという点において「おぼゆ型」や「と下接型」と近親的関係にあると言いうるわけである。

ところでこうした対象不明記な述語用例といえども、これは形の上からいえばまさしく述語の用例である。従つて文の形の上からいえば主語の座が空席になつているわけであり、そこになんらか別なものが主語として入る余地があるわけである。そこに次のような用例の発生してくる可能性がある。

15たまさかにはひわたり給ふついでをまつ事にて人わらへにはしたなきことといかにあらむと思ひみだれてもまたさりとてかゝる所におひいでかずまへられ給はざらむもいとあはれなればひたすらにもえうらみそむかず　（源氏物語　松風）

16一かたならぬ世のつゝましさをもあはれをも思ひみだれてなげきがちにてものし給ふけしきなどもいまはじめたらんよりもめづらしくあはれにてあけゆくもいとくちをしくていで給はん空もなし　（源氏物語　若菜）

15の例は「かずまへられ給はざらむ」が主語で「あはれ」が述語になつているが、同時に「あはれ」は下文の「ひたすらにもえうらみそむかず」という明石上の行為の原因となつている点から見てこの「あはれ」は明石上の心情の表出の性格が濃い用例である。又、16の用例についても朧月夜の御けしきが源氏には「あはれ」に感じられて、源氏をして「いで給はん空もなし」という状態ならしめているという表現である。

そして、もしこの15・16のような用例に主体の感想表出性が更に強くなつて来た形を想定するとおそらくかかる所におひいでかずまへられ給はざらむをあはれに思へば　（例文15について）

なげきがちにてものし給ふけしきなどを（中略）あはれにおぼして　（例文16について）

右の如く、16・17において主語の位置にあつた対象が、俗にいう目的語の形になつて、おぼゆ型やと下接型の表現になるのではなかろうか。

そして更にもう一段とその主体側の感情・気持ちの表出の要素が強くなつてくると

かかる所におひいでかずまへられ給はざらんを思ふにいとあはれにて　（例文16について）

かゝる所におひいでかずまへられ給はざらんを思ふにいとあはれにおぼえて　（例文16について）

の如く、15・16のもとの文の主語にあたる対象は感情発生の原因という形になつてしまうものと思われる。

実際にも、これらの推察して作つて見た各作と同じ形の用例も多くみられる。

17なにばかりのものとも御らんぜざりし人もむつましくあはれにおぼさるればわがもとにあれかしあなたもてはなるべくやはとの給へば　（源氏物語　蜻蛉）

18御返今はかくしもかよふまじき御ふみのとぢめとお

ぼせばあはれにて心とどめてかき給ふ　（源氏物語若菜下）

以上の如き検討によつて、不十分ながらも感情表出性を有する形容詞類にあつては主体の感想・感情あるいは判断の表出の要素と、対象物の客体的性状の記述の要素とが対立しているということは肯定しうると思う

いかに神妙なる言語表現を用いたにせよ、同時に二つの要素のそれぞれを百パーセントに表出することはできない。従つてこの場合も、一方の極に主体の感情を露呈する表現が百パーセントの文型があり、他方にそのような感情の発生をもたらした対象物の有する性状を記述する働きの百パーセントな文型があるのは当然としても、この両者の関係は水と油の如く完全に反撥しあい、二者択一を文体に対して要求するような性質ではない。したがつてこの両方がいろいろな割合いで混入して調和しているいくつかの表現形式の段階が生じてくるのは自然である。

私はこれまでの調査と試論を整理して、それらの段階を次の如く分類してみた

1主語という形で記述の対象が明記され、百パーセント（あるいはそれに近く）その対象の客観的性状の記述になつている表現

2主語の形で対象が明記されている一方で、主体者の、その対象の性状に対する感想の表出も加わつている表現

3対象が俗にいう目的語の形で示されている「おぼゆ型」「と下接型」の連用修飾の表現

4対象が明記されていないで、主体の感情表出性が強いが、猶省略されている対象の意識が残つている表現

5対象の明記されていない「おぼゆ型」・「と下接型」表現で、省略された対象への意識が残つている例

6対象が全然明示されていない、主体の感情表出性のきわめて強い表現

7対象の全然明示されていない、「おぼゆ型」・「と下接型」の表現

実例のタイプをより分けることによつて作整したこの分類にはかなりな妥当性があると私には思われる。したがつて、ただちに全形容詞類の述語用例及び、「おぼゆ型」・「と下接型」用例をこれによつて分類すれば、そ

れぞれの語の性格が対象記述性と感情表出性のレールの上に位置づけられ、それによつて源氏物語において用例率の大幅に伸びた語がどのような語であるかはかなり明白になると思う。ただし、この分類をただちに行なう前に、もう一二点考慮しなくてはならない点がある。

17御なやみにことつけてさもやせんとおぼしよれど又いとあたらしうあはれにかばかりとほき御ぐしのおひさきをしかやつさんことも心くるしければ　（源氏物語　柏木）

18大事と思ひまはしてよみいだしつらんとおぼせば歌の心ばへもいとあはれにてなほざりにさしもおぼさぬなめりとみゆることの葉をめでたくこのましげに書きつくし給へる人の御文よりはこよなく目とまりて　（源氏物語　早蕨）

右の如き用例であるが、そのうちまず17の文についていうと、この「あはれ」の用例は前後の文意から見て、「女三の宮」がという表記されていない主語（対象）がかなり強く意識される。今日の一般的な見地からいうと、このような例は、貴人の名及びそれに準ずるものをなるべく明記しないようにしていた当時の文章の表現感覚に由来した主語省略の例である。

このような当時の言語社会の風習やまた純粋に修辞上の理由による省略形は当然形容詞類の述語用例を持つ文の中にも多くあるはずである。又、だからといつて前掲の分類の4の項などを更に対象性の希薄化によるものと修辞上の省略によるものとに機械的に二分すればよいなどと安易に考えるのは言語表現に対する認識不足である。言語は常に諸要素の微妙な相関と均衡の上に成立している。この場にしても、たとえ作者の意図が純粋に修辞上の必要から主語を省略したものであつても、できあがつた文は、同時に、主語が明記されている例とは違つた均衡を生じて、結果としてはどうしても、対象の明記されている文よりも主体の感情表出のウェイトが大きくなつてしまう。

更にこうした17の例の逆の場合が18の例文（これは先の分類では2の項に入るものだが）である。18の文は前後の文の記事によつて、直接表現されてはいない主体の感想がきわめて濃厚に出てきている例である。

こうした例を考えれば、前掲の分類だけを対象性と感情表出性の割合を示す尺度とするのは正しくないことがわかる。ただこれは、形容詞類の述語的用例を表現形態の上で段階的な型に分類したにすぎないものである。こ

のような形態による他に、修辞上の問題、前文からの続き具合や後文との関連などが、実際の表現には大きなウエイトを持つであろうし、更にもう一つ次のような点も考慮されねばならない。

同じ表現形態をとつていても17の文の「あたらし」と「あはれ」とでは、本質的にそれぞれの語が持つている表現内容のカラーの違いがあるのではなかろうか。例えば「あたらし」の方が「あはれ」よりも対象記述的ニューアンスが元来濃い語ではなかろうかというような各語の持ち味を計算に入れないでよいのであろうか。

こうした点を考えるとこの対象性と感情性の分類を完全に行なうためには、更に個々の語の各用例をこまかく検討し、いわゆる語源の研究もとり入れねばならない。今回のこの小試論ではまだその点大きな疑問も多く、未整理な点も多いのだが、文章のより正しい解釈という目標追求の上に、語の用例の形態の組織的研究の面から少しでもプラスになる点があればという気持ちから、形容詞類における対象性と主体の感想・感情表出性を対比検討して見た次第である。

最後に、前出の表Cの各語の述語用例について、記述の対象が文中に明記されているものと、対象が文中に表記されていない例とにそれぞれの用例数を分類したものを示して、この調査の有効性を暗示することで今回のこの稿を一応とどめたく思う。

表F-1

語＼用例数	対象記載例	対象不記載例	おほめと下接型多し	述語最多	源氏でふえた語
あさまし	6	(64)	○	○	○
あながちなり	3	0			○
あし	(34)	9		○	
あをし	1	0			
あやし	33	(77)			
あはれなり	(144)	(74)	○	○	○
いかめし	16	2			
いたし	6	0			○
いとほし	(104)	(87)	○	○	○
いみじ	33	(42)			○
うし	18	4			○
うれし	14	(64)	○	○	
おなじ	0	5			
おほいなり	2	0			
おほし	(342)	29			
おそし	3	2			
おそろし	23	29	○	○	
おぼつかなし	14	(43)		○	
おもしろし	(58)	10			
かぎりなし	(50)	3			
かしこし	15	23			
かなし	25	(63)	○	○	
きよらなり	34	12		○	
くちおし	(61)	(62)	○	○	○
くるし	(70)	(62)	○	○	○
心くるし	(86)	(44)	○	○	○
しろし	8	9			
をかし	(144)	21	○		○

右の表は表C記載の形容詞類の述語用例をその記述の対象が明記されているかいないかによつて分類したものである。最左の二欄は各語の述語用例総数を対象記載と不記載とに分けたもので、その右の三欄に先の表B・C・Dで分類した結果を記入したものである。すなわち左から三つ目の欄にはおぼゆ型・と下接型の用例の多い語のところにO印付したものであり、同様に四つ目の欄には表Cで述語用例の最も多かつた語に、最後の欄にはA・B表で宇津保物語にくらべて源氏物語における用例率が大幅にふえている語にそれぞれO印を付した。

まずこの表の対象不記載の欄を見てほしい。この欄の用例数が比較的多いものの数字を○印でかこんでみた（用例数四〇以上）。あさまし、あやし、あはれ、いとほし、いみじ、うれし、おぼつかなし、かなし、くちをし、くるし、心くるしの十一語がそれである。そこで更にこれらを右側の三項と対照してみると、まず、あやし、いみじ、おぼつかなしの三語以外はすべておぼゆ型・と下接型の用例の多い語である。そして、同時にそれらはすべて、述語用例のもつとも多い語にあてはまる。更にそのうちうれしとかなし以外の語はすべて源氏物語中に用例が大幅にふえている語である。この点から見ても、述語用例の多い語とおぼゆ型・と下接型の多いものと述語用例中に対象の不明記な用例の多い語とには深い関連性があることが見られる。その関連性とはすなわち、形容詞類の感情表出性の有する表現形態ではないかと思われる。すなわち感情表出性の強い語は必然的におぼゆ型やと下接型による主体の感想や判断の表出例が多い結果になり、又そういう語には対象との直結の性質の強い連体修飾や連用修飾よりも述語の用例が多く、しかもその中には対象不明記の用例が多く含まれているということではなかろうか。そして、そのような用例の多い形容詞類が源氏物語で大幅に増加しているということは、源氏物語の文体としての発展の大きな要素の一つに感情表出性の要素の増大を数えることが妥当であることを示していると思われる。

ところで、それでは源氏物語の文体――世にいう情緒的な文――においてはとにかく感情表出性の強い表現が増加した、なかんずく主体側の感情の表出が百パーセントに近いような表現が文体の大きな特徴をなしていると判断するのは正しくない。先に示した如く感情表出性と対象記述性とは入り混つて、いくつもの微妙な均衡を作つ

ているが、それらは単に両者の傾向の比率の違いという直線的な関係ではない。世に量的価値は質的価値を変えるという比喩があり、炭とダイヤモンドが同原素の結合のちがいで説明されるように、この感情表出性と対象記述性の比率の違いも表現としての効果にはかなり大きな違いを生ぜしめるものである。

再び表Fを見られたい。そこには不完全ながら次の二点が注意を引くであろう。

一、きわめて主体の感情表出性の濃い話、うれしとかなし（かなしの用例中いわゆるかわいい・いとしいの訳語の相当する類は源氏物語中ではすでにごく僅かになつている）の用例数は源氏においてはさほど増大していない。

二、対象不記載の用例が多い語のうち、源氏物語で大幅に用例率のふえているものには、あはれ、いとほし、くちをし、くるし、心くるしなど、対象記載の用例が更に多い語が多くあり、なかんずくあはれにあつては二倍の百五〇例近いものが　対象記載の用例として数えられる。

これらの対象記載の用例を調べてみると、

19 さるべきにや昔よりはなれがたうおもひきこえていまはかくくだくしき人のかずくあはれなるをかたみに見すつべきにやはとたのみきこえける　（源氏物語　夕霧）

20 姫君のあけくれにそへてはおもひなげきたまへるさまの心くるしさはなにことにもすぐれてあはれにいみじきを

右の如き対象が明記されていても、前後の文などにより主体の感想が強く表出されている側（すなわち、前述の分類によれば2の項に属す型）が多い。極めて微妙な関係ではつきり判断のつきかねるような用例をすべて除外して、こうした主体の感想のはつきり指摘できる最少限の用例数を、この類のあはれについて拾い出して見ると、全体で、一五〇例そこらの対象明記述語用例のうち八八例を数えた。他に私の解釈力の不足などからよくわからないとして数えなかつたものにもこれに属する例がかなりあると思う。

その反対にうれしやかなしの類を見ると対象の記載されている用例はずつとすくなく、

21 さなんとあなたにもかたらひの給ひければいみじくうれしくおもふことかなひはつる心ちして　（源氏

物語　藤裏葉）

の如き主体の感情の表出の純度の高い例がほとんどである

こうした点から考えると、源氏物語において増大した感情表出性というのは、単に主体側の感情・気持ちの表出にウエイトを置いた表現ではなくて、客体的対象の意識もかなり強く、しかじかの物（あるいは事、様）に対して、主体がしかじかの感情・感想をいだくという型の表現が多いようである。

こうした、対象物の明示から来る文中の客体的事象の描出の明確さと、又一方それに対する主体側の生々しい感情・感想の表出が、同一の文の中に混合し融合して、一つの調和を生み出しているところに、いわゆる源氏物語の情緒性の豊かな、うるおいと現実感のある、独特の文芸味が完成したのではなかろうか。

結び

源氏物語と宇津保物語を比較して論じるつもりが、源氏物語の用例を検討することに忙しくて、宇津保の方をとり上げるスペースがなくなってしまったが、大略して、源氏においては宇津保にくらべると連体修飾や連用修飾よりも述語やと下接型・おぼゆ型の用例数がふえているようである。

まだまだ調査は不完全で、納得のいかない現象も多いが、この対象の性格の記述と主体の感情の表出の要素の均衡という見地から整理を進めていけば、今まで意味の把握がむつかしかつた語などの意味を解明して行く上にも大きな手がかりになるだろうと思われる。

（鈴鹿工専　講師）

神道集巻第九「北野天神事」ノート（二）

―その「文学」性―

村上　学

さきに記したように、神道集巻第九「北野天神事」は安楽寺本系統の天神縁起、特に黒川本、梅椿坊本系統の縁起本文に甲類第一種本の縁起の本文を適宜きざみ込んで作りあげられたものであるが、この説話のみならず、例えば真字本曽我物語と神道集間に五十数箇所、相互の分量の約一割にわたる同文個所が発見されたり、また巻四の十九話から巻六の三十二話にいたる説話に引用されている経文がかなり正確である事など、神道集の説話の蒐集は書承によるものと考えなければならない点が多い。従ってわれわれはそれだけ神道集の性格をつかむ手がかりを強く持っている筈であるが、まま神道集について指摘されるようにトレーガーの面の研究はある程度の進展を見たとはいうものの①神道集の性格を内在的に探る試みが殆んどされていないのは、一面その教義的な本性が難解である事のためであるが、それと同時に、その書承性の認識の甘さ、引いてはそれから来る原拠追求探索の不徹底さを因とする面もあるように思われる。今幸にしてこうした面における考察の手がかりを得た以上、これについて臆測を逞しくして神道集の性格を内在的にさぐってゆく足場の一つにしたいと思う。その前提として、原拠になった安楽寺本系統の北野天神縁起の性格をまず考えてゆきたい。

(一)

もともと北野天神縁起に登場する道真は統一された性格を持っていない。既におおの氏②、篠田氏③がふれて居られるように、天神縁起は、優れた才能を誇る貴族として道真を画いた第一部、すさまじい執念をはらさずにはおかない火雷天神となった彼の怨霊を画いた第二部と、贈官・社壇創設以降無実の罪を免れしむる慈悲神として北野天神を画いた第三部が、素材の未消化のまま、対等